

イエスの笑い・論争

滝澤 武人

1

「笑い」という新しい視点から福音書のテキストを読みなおし、新しいイエス像を探求することが本稿の課題である。すでに本論集第45号（2010年，序論）と第46号（2011年，金持）において試論的に論じてきた。イエスはユーモア精神に溢れた楽しい人間であり，福音書のあちこちからさまざまな笑い声が聴こえてくる。それはイエス周辺の親しい仲間との気楽な会話だけではなく，敵対者であるユダヤ教指導者層（律法学者やファリサイ人）に対する批判や論争の中にも，かなり多く見いだされる。イエスの人間認識は鋭く的確であり，敵対者たちの問題点や偽善性をはっきりと見ぬき，皮肉たっぷりに彼らを批判している。そこに居あわせた聴衆の中には，笑いが自然に生まれていたであろう。

「律法学者」は，聖書の律法（法律）に関する研究，教育を任務とするのみではなく，ユダヤ教会堂の指導者や裁判官の座に着き，ユダヤ教支配体制を中心とする権力構造の一翼を担う人間たちであった。特に，エルサレム神殿に仕える律法学者たちは，まさにエリート階級の頂点に立つ者としての誇りと自負心に満ちていた。彼らはことあるごとに地方に出向き，さまざまな指導をなしていた。イエスのもとにもエルサレムから派遣された律法学者た

キーワード：福音書，物語，現場，皮肉，ユーモア

ちがやって来て、論争をくりひろげている（マルコ3,22, 7,1など）。

「ファリサイ派」は、基本的には律法の命令を世俗の生活のすみずみにまで浸透させようとする、敬虔で真面目な一般信徒運動である。ある程度豊かな都市知識人階級を中心に発展し、理想主義・進歩主義・革新主義的な傾向が見いだされ、ある意味では西欧近代の「ピューリタニズム」とも比較しうるであろう。しかしながら、彼らはユダヤ教律法を守りえない人間たちを「地の民」（土民）と呼び、厳しい差別の対象となしていた。社会の「最底辺者」たちとともに生きるイエスは、ファリサイ派と厳しい論争を展開せざるをえなかったのである。

以下、テキストは基本的に『新共同訳聖書』（日本聖書協会、2006年）から引用したが、部分的に修正を加えたり、私訳を掲げた場合もある。「イエスの笑い」を論ずるためには、イエスの活動現場における生き生きとした発言を再現させるような表現の工夫が今後の課題となるであろう。たとえば、最近出版された山浦玄嗣『ガリラヤのイエシュエ』（イー・ピックス出版、2011年）は、四福音書を岩手県気仙地方の方言である「ケセン語」に翻訳するという大胆な冒険・実験であり、今後大いに注目されるべき労作であろう。

なお本稿には、これまでの拙著『人間イエス』（講談社現代新書、1997年）、『イエスの現場』（世界思想社、2006年）と重複した叙述も含まれている。

2

マタイ福音書23章には、律法学者やファリサイ人に対する批判がまとめられている。それらのどこまでがイエス自身の発言で、どこまでがマタイによる加筆や修正であるかについては、微妙な判断が要求される。しかしながら、次のような発言にはイエスらしいユーモアと皮肉に充ちた批判精神が躍動しており、おそらくイエス自身にまで遡りうるものと認められるであろう。

律法学者たちやファリサイ派の人々は、モーセの座についている。だか

ら、彼らが言うことは、すべて行い、また守りなさい。しかし、彼らの行いは、見倣ってはならない。(3節)

彼らは背負いきれない重荷をまとめ、人の肩に載せるが、自分ではそれを動かすために指一本貸そうともしない。(4節)

あなたたち偽善者は不幸だ。人々の前で神の国を閉ざすからだ。自分が入らないばかりか、入ろうとする人をも入らせない。(13節、一部修正)

あなたたち偽善者は不幸だ。^{はっか}薄荷、いの^{ういきょう}んど、茴香の十分の一は献げるが、律法の中で最も重要な正義、慈悲、誠実はないがしろにしているからだ。(23節)

あなたたちはぶよ一匹さえも^こ漉して除くが、らくだは飲み込んでいる。(24節)

最初の発言にはマタイ的要素が混入しているが、それ以上にイエスの皮肉な批判精神が充溢している。第2の発言とともに主語が「彼ら」なので、イエス周辺の民衆に向かって語られたのであろう。爆笑の光景が目に見えかねてくる。

第2の「重荷」とは、ユダヤ教の律法を守って生きることの比喩である。イエス周辺の人間は社会の最底辺に生きる者が多く、ユダヤ教の戒律や儀礼を遵守しえないような状況にあった。律法学者やファリサイ人たちは重荷を背負わせるだけで、指一本貸そうともしない。重荷をまとめて肩まで載せることができるのに、その力をまったく使おうともしない。「指一本」という表現が聴衆の笑いを引き出している。

第3の発言はイエスの笑いの傑作の一つであろう。イエス特有の辛辣な批判精神とユーモア感覚に充ちている。「お前たちは神の国に入る扉に大きな

鍵をガチャンとかけてしまった。だがお前たち自身もそこに入れなくなってしまったのだ！」聴衆は大爆笑であったと思われる。

第4は説明不要であろう。第5はそれを皮肉たっぷりに語り直しており、「らくだ」を用いた大小関係の極端な比喩の巧みさにおいて、次の言葉と共通している。

金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。
(マルコ10,25)

「山上の説教」(マタイ5～7章)の中にも、律法学者やファリサイ人に対するユーモアあふれる批判が見いだされる。次の発言はおそらくイエスに遡りうるであろうが、「偽善者」は律法学者・ファリサイ人を批判するマタイの用語法である。なお、「施し」「祈り」「断食」はユダヤ教の根本にかかわる宗教儀礼である。

あなたは施しをするときには、偽善者たちが人からほめられようと、会堂や街角でするように、自分の前でラッパを吹き鳴らしてはならない。はっきりあなたがたに言うておく。彼らは既に報いを受けている。施しをするときは、右の手のすることを左の手に知らせてはならない。
(6,2-3)

偽善者たちは、人に見てもらおうと、会堂や大通りの角に立って祈りたがる。はっきり言うておく。彼らは既に報いを受けている。だから、あなたが祈るときは、奥まった自分の部屋に入って戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。(6,5-6)

断食するときには、あなたがたは偽善者のように沈んだ顔つきをしてはならない。偽善者は、断食しているのを人に見てもらおうと、顔を見苦

しくする。はっきり言うておく。彼らは既に報いを受けている。あなたは断食するとき、頭に油をつけ、顔を洗いなさい。それは、あなたの断食が人に気づかれず、隠れたところにおられるあなたの父に見ていただくためである。(6,16-18)

「断食」については、次のようなイエスの言葉も伝えられている。イエス及びイエス周辺の民衆は断食をしていなかった。というよりも、いつも食べるべき物がなような状況であったので、断食どころではなかったのであろう。今は婚礼の時、悦びの時であり、決して断食の時ではないのである。

人々はイエスのところに来て言った。「ヨハネの弟子たちとファリサイ派の弟子たちは断食しているのに、なぜあなたの弟子たちは断食しないのですか。」イエスは言われた。「花婿と一緒にいるのに、婚礼の客は断食できるだろうか。」(マルコ2,18-19)

3

イエスのこんな発言が残されている。われわれは文書化された福音書を読まざるをえないのだが、ここは絶妙の語り口にじっくりと耳を傾けなければならない。

今の時代の人たちは何にたとえたらよいか。彼らは何に似ているか。広場に座って、互いに呼びかけ、こう言っている子供たちに似ている。

「笛を吹いたのに、
踊ってくれなかった。
葬式の歌をうたったのに、
泣いてくれなかった。」

洗礼者ヨハネが来て、パンも食べずぶどう酒も飲まずにいと、あなた

がたは、「あれは悪霊に取りつかれている」と言い、人の子が来て、飲み食いすると、「見ろ、食い意地のはった酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ」と言う。(ルカ7,31-34, 一部修正)。

これもまた実にうまい語り口だ。そして、どこかで聞いたような気がする。そう、あの「からし種」の譬え(マルコ4,30-32)の出だし部分とそっくりではないか。「神の国を何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか……」である。ここでもイエスはきわめて気楽に語っているのである。そして、「今の時代の人たち」及び「彼ら」という三人称を用いて、その時代一般の動向を暢気そうに語り出している。彼らは街の広場に座り、婚宴組と葬式組の二手に分かれ互いに呼びかけあう(おそらく歌いあう?)子供たちの遊びとそっくりだと言うのだ。ここまでは、「今の時代の人たち」を広場に座って呼びかけあいながら遊びに興じている「子供たち」にたとえているだけである。イエスが語りかける相手はまだ登場していない。

だが、ここから状況が一変する。主語も一般的な「彼ら」ではなく、目の前にいる「あなたがた」に変わっている。その「あなたがた」とは、洗礼者ヨハネが禁欲的な生活をする、「あれは悪霊に取りつかれている」と批判し、イエスが当たり前で飲み食いすると、今度は「食い意地のはった酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ」と批判する。そのような激しい言葉でヨハネやイエスを批判する人間とは、おそらく律法学者やファリサイ人だったのであろう。イエスは彼らを広場で遊ぶ子供たちに譬えている。大人を子供に譬えること自体、彼らに対する痛烈な皮肉である。ヨハネやイエスを批判する敵対者たちの姿勢を、イエスはまったく子供じみたものとして扱っているのだ。聴衆の間には失笑が漏れていたにちがいない。もしこれが後半部分だけだとすると、別に何の面白みも愛嬌もない。たんなる冷たい皮肉でしかない。だが、前半の比喻をあらかじめ語ることによって、様相はガラリと一変し、皮肉な笑いが生まれてくる。

4

「律法学者」に対する批判を見てみよう。

律法学者に気をつけなさい。彼らは、長い衣をまとって歩き回ることや、広場で挨拶されること、会堂では上席、宴会では上座に座ることを望み、また、やもめの家を食い物にし、見せかけの長い祈りをする。このような者たちは、人一倍厳しい裁きを受けることになる。

(マルコ12,38-40)

ここには律法学者たちの振る舞いに対する痛烈な批判があり、そのような体験を見聞きしていた民衆の中に共感と爆笑の渦が沸き起こったことであろう。「挨拶」については、律法の知識において劣っている者（位^{くら}い低い者）から挨拶しなければならない風習があったという（マリーナ、ロアポー『共観福音書の社会科学的注解』大貫隆監訳、加藤隆訳、2001年、新教出版社、300頁）。

マルコ福音書によると、イエスのこの発言は、律法学者たちの根城^{ねじろ}であるエルサレム神殿の境内においてなされたものである（11,27）。するとおそらくイエスは、律法学者たちのこのような光景を実際に眺めていたのであろう。「やもめの家を食い物にし」と「見せかけの長い祈りをする」は別々の事柄ではなく、社会的弱者である「やもめ」たちに律法を教え、謝礼として金品を提供させたうえ、その口実として自己弁護的な長ったらしい祈りをするということである。

次の言葉もまた、裁判官役を務める律法学者たちを批判しているのであろう。基本的には、非常に厳しい言葉であるが、どこかにそこはかとないユーモアが漂っている。イエスが裁判官たちの心の奥底をじっと見つめているからであらう。

人を裁くな。あなたがたも裁かれなくようにするためである。あなたがたは、自分の裁く裁きで裁かれ、自分の量の秤で量り与えられる。

(マタイ7,1-2)

イエスは、律法学者たちを真正面から痛烈に批判している。

あなたたちは不幸だ。自分の先祖が殺した預言者たちの墓を建てているからだ。こうして、あなたたちは先祖の仕業の証人となり、それに賛成している。先祖は殺し、あなたたちは墓を建てているからである。

(ルカ11,47-48)

これは大いなる逆説の言葉であり、大いなるブラック・ジョーク、ブラック・ユーモアとして読まれなければならないであろう。ブラック・ユーモアは、「反社会性」「反逆的な性格」を特徴としており、端的に言えば「タブーを笑う」ことにほかならず、ある種のドス黒さがつきまとっている（阿刀田高『ユーモア革命』文春新書、2001年）。もちろん、預言者たちの墓を建てること自体が批判されるべきではない。だがイエスは、預言者たちを殺した末裔^{まつえい}たちがその墓を建てていると批判するのである。そして、預言者たちの墓を建てたその人間たちが、民衆から預言者とみなされていた洗礼者ヨハネやイエスを殺すことに加担する。

「悪しき農夫」の譬えもまた、このような「ブラック」系列の延長線上に位置づけられるのではないと思われる。そして、ここにもまたやはりイエスのどす黒い笑いが潜んでいる。

ある人がぶどう園を作り、垣を巡らし、搾り場を掘り、見張りのやぐらを立て、これを農夫たちに貸して旅に出た。収穫の時になったので、ぶどう園の収穫を受け取るために、僕^{しもべ}を農夫たちのところへ送った。だが、農夫たちは、この僕を捕まえて袋だたきにし、何も持たせないで帰した。

そこでまた、他の僕を送ったが、農夫たちはその頭を殴り、侮辱した。更に、もう一人を送ったが、今度は殺した。……さて、このぶどう園の主人は、どうするだろうか。(マルコ12,1-9)

この物語の「主人」は「神」,「ぶどう園」は「イスラエル」,「僕」は「預言者」,そして「農夫たち」は「ユダヤ教指導者」の隠喩であろう。イエスはここで、イスラエルの管理を委ねられているユダヤ教指導者たちを痛烈に批判しているのである。共観福音書も、ユダヤ教指導者たちが「イエスが自分たちに当てつけてこのたとえを話されたと気づいた」(マルコ12,12、ルカ20,19)と記している。なお、省略した5節後半～7節、及び9節後半～11節は、原始キリスト教団による付加であろう。

イエスのブラック・ユーモアは、金持が死んで地獄に落ちる「金持と乞食ラザロ」の物語(ルカ16,19-26)、驕り高ぶる金持の命が取り上げられる「愚かな金持」の物語(ルカ12,16-20)などにも見いだされる。

5

イエスが「悪霊追放」を積極的になしていたことは、福音書のあちこちに記されている。マルコ福音書はそれを編集句において繰り返し強調している(マルコ1,35、3,11-12など)。ルカ福音書には次のように記されている。「三日目にすべてを終える」は原始キリスト教団による加筆であろう。

ちょうどそのとき、ファリサイ派の人々が何人か近寄って来て、イエスに言った。「ここを立ち去ってください。ヘロデがあなたを殺そうとしています。」イエスは言われた。「行って、あの狐に、『今日も、明日も、悪霊を追い出し、病気をいやし、(三日目にすべてを終える)』とわたしが言ったと伝えなさい。(ルカ13,31-32)

悪霊追放はイエスの基本的使命である。そして、イエス自身はそれを神の力によってなしていると自覚している。「わたしが神の指で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなたたちのところに来ているのだ」(ルカ 11,20)。しかしながら、敵対者たちはそれを批判する。「ベルゼブル論争」のテキストである。

エルサレムから下って来た律法学者たちも、「あの男はベルゼブルに取りつかれている」と言い、また、「悪霊の頭^{かしら}の力で悪霊を追い出している」と言っていた。そこで、イエスは彼らを呼び寄せて、たとえを用いて語られた。「どうして、サタンがサタンを追い出せよう。国が内輪で争えば、その国は成り立たない。家が内輪で争えば、その家は成り立たない。同じように、サタンが内輪もめして争えば、立ち行かず、滅びてしまう。また、まず強い人を縛り上げなければ、だれも、その人の家に押し入って、家財道具を奪い取ることはできない。まず縛ってから、その家を略奪するものだ。」(マルコ3,22-27)

冒頭の「エルサレムから下って来た律法学者たち」という文言に注意しよう。イエスが活動するガリラヤ地方には、「律法学者」は定住していなかったらしい。わざわざエルサレムから下って来たというのだから、よほどのことだったのにちがいない。ヘロデ・アグリッパがイエスを殺そうとしていたのも、悪霊追放のためだったと思われる。

イエスはここで敵対者たちの批判にまともに答えてはいない。内輪もめの譬えをもってその批判をはぐらかしている。サタンがサタンを追い出すことなど不可能だと、国と家の内輪もめという具体的な譬えで説明しているのである。ここにはイエスのユーモア精神が脈うっており、律法学者たちの氣勢もそがれてしまったことだろう。おそらく周辺にいた民衆の中に笑いが生じたのではないと思われる。

それに続く譬えがまた面白い。自らの悪霊追放の業を、家の家財道具を略

奪する「強盗」に譬えているのである。「強い人」はその家の中に住む悪霊の頭であるベルゼブル（あるいはサタン）、その家に押し入り家財道具を略奪するのが、なんと神（あるいはイエス）である。まさにびっくりしてしまうような譬えである。まさに大貫隆が記しているように、「イエスが神と神の国について比喩的に語る時、通常の常識からすれば憚られるような表現やイメージを、憚ることなく用いる」（大貫隆『イエスという経験』岩波書店、2003年、92頁）のである。イエスが強盗の業のすべてを知りつくしているかのようなのである。ここにも痛快的民衆の笑いがあったにちがいない。

次のイエスの発言も、追放された悪霊の心の中を面白可笑しく語っている。

汚れた霊は、人から出て行くと、砂漠をうろつき、休む場所を探すが見つからない。それで、「出て来たわが家に戻ろう」と言う。そして、戻ってみると、家は掃除をして、整えられていた。そこで、出かけて行き、自分よりも悪いほかの七つの霊を連れて来て、中に入り込んで、住み着く。そうすると、その人の後の状態は前よりも悪くなる。

（ルカ11,24-26）

6

「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に」というあの有名な論争の中にも、イエスのユーモア精神が見いだされる。

人々は、イエスの言葉じりをとらえておとし陥れようとして、ファリサイ派やヘロデ派の人を数人イエスのところに遣わした。彼らは来て、イエスに言った。「先生、わたしたちは、あなたが真実な方で、だれをもはばからない方であることを知っています。人々を分け隔てせず、真理に基づいて神の道を教えておられるからです。ところで、皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか、適っていないでしょうか。納める

べきでしょうか、納めてはならないでしょうか。」イエスは彼らの下心を見抜いて言われた。「なぜ、わたしを試そうとするのか。デナリオン銀貨を持って来て見せなさい。」彼らがそれを持って来ると、イエスは、「これは、だれの肖像と銘か」と言われた。彼らが、「皇帝のものです」と言うと、イエスは言われた。「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」(マルコ12,13-17)

冒頭部分はマルコの付加した編集句であるが、全体的状況はこのようなのであったと考えてよいであろう。マルコ福音書によれば、「人々」とは「祭司長、律法学者、長老たち」、論争の場所は「神殿の境内」となる(11,27)。イエスは聖なるエルサレム神殿をなんと「強盗の巢」と呼び(11,27)、その崩壊をも予告している(13,2)。エルサレム神殿の祭司長や律法学者たちもまた、「イエスをどのようにして殺そうかと謀った」(11,18)という。したがって、この論争はイエスと神殿勢力との厳しい対決という視点から読まなければならないであろう。

ここで問われているローマへの納税に関して、ファリサイ派(その中でも特に伝統的ユダヤ主義を強調するシャンマイ派)は断固拒否の立場、「ヘロデ派」(ローマ皇帝の傀儡的存在)は当然それを容認する立場である。すなわち、イエスがローマへの納税を容認しようが拒否しようが、いずれにせよ逃れようのない罠に嵌められるしかない。絶体絶命の危機である。まさに、「イエスの言葉じりをとらえて陥れようとして」、念入りに準備されていたのであろう。

しかしながら、イエスの方もさすがに「彼らの下心を見抜いて」、「デナリオン銀貨を持って来て見せなさい」と言い放つ。この意外性に満ちた一語が実にすばらしい。よくもまあこんな時にこんな事を言えるものだ。その場の厳しい雰囲気を一挙に解消させ、攻守を入れ替えさせる時間を見事につくりだしている。想定外の返答によって、敵対者たちはデナリオン銀貨を持ってこざるをえなくなる。ここからはテキストの行間を慎重に想像しなければな

らない。おそらくイエスはその銀貨を手にとってじっくりと眺めた後で、彼らにそれを手渡ししながら、おもむろに「だれの肖像と銘か」と言ったのだろう。イエスはまさに千両役者である。攻守が完全に入れ替わっている。敵対者たちの頭の中はかなり混乱していたはずである。そして、彼らが「皇帝のもの」と答えると、すかさずイエスが言う。「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」

この言葉の解釈はかなり難解であるが、田川建三の見解がもっとも適切であろう。すなわち、「皇帝のもの」はローマ帝国への人頭税、「神のもの」はエルサレム神殿への神殿税であり、「皇帝のものなら皇帝にお返し申し上げればいいだろう。——神様のものは神様にお返し申し上げさせられているんだから」（『イエスという男』第二版、作品社、2004年、126－127頁）というニュアンスとなる。それは敵対者たちに対する「強烈な皮肉」を含んだ「痛快なせりふ」である。

イエスの目前にいる敵対者たちは、ファリサイ派（＝納税拒否）とヘロデ派（＝納税容認）である。すると、イエスの発言の前半部分はヘロデ派に対する批判、後半部分はファリサイ派に対する批判となっている。すなわち、次のように読むことができるであろう。「皇帝の肖像と銘のあるものなら、さっさと皇帝に返さなければならないだろう。（どんなにあがいてみたところで、どうせヘロデ派が黙っているわけがないだろうからな。）そして、神のものは神に返せということさ。（どんなにいやだと言ってみても、どうせお前たちファリサイ派が厳しく取り立てていくにきまっているからな。）」

イエスのこの言葉は、ファリサイ派とヘロデ派の両方に対する鋭い批判になっている。「納税は是か否か」という敵対者たちの問いかけをややずらしながら、権力を笠に着て税金を徴収している人間たちの現実を、皮肉や嫌味をたっぷり籠め、ややからかいながら批判しているのである。ローマへの税であれ神殿への税であれ、重税に苦しんでいた民衆は思わず失笑してしまったにちがいない。

なお、この段落の冒頭部分はマルコの編集句なので、もともとは「ファリ

サイ派」のみのところにマルコが「ヘロデ派」を付加した可能性もある。しかしながら、やはり両方を批判するものとした方が刺激的でイエスらしい。

7

次の「離縁論争」の中にも、イエスのユーモア精神が見いだされる。

ファリサイ派の人々が近寄って、「夫が妻を離縁することは、律法に適っているでしょうか」と尋ねた。イエスを試そうとしたのである。イエスは、「モーセは、お前たちに何と命じたか」と問い返された。彼らは、「モーセは、離縁状を書いて離縁することを許しました」と言った。イエスは言われた。「お前たちの心が^{かたく}頑ななので、このような掟をモーセは書いたのだ。しかし、天地創造の初めから、神は人を男と女とお造りになった。それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一つの肉体となる。だから二人はもはや別々ではなく、一つの肉体である。従って、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない。」(マルコ10,2-12, 一部修正)

ファリサイ派が押しかけてきたのは、いつものように「イエスを試そうとした」からである。「離縁」について、イエスがどれだけ律法に精通しているか、その実力のほどをわざわざ「試し」に來たのである。そして、ここでもイエスは敵対者自身に答えさせている。すると彼らは得意げに（あるいは渋々と？）モーセ律法を持ち出してくる。

人が妻をめとり、その夫となってから、妻に何か恥すべきことを見いだし、気に入らなくなったときは、離縁状を書いて彼女の手に渡し、家を去らせる。(申命記24,1)

いかに古代社会であるとはいえ、「男中心主義」をあからさまに主張している。もちろん、「人」とは「夫」であり「男」である。「妻をめとり」とは、「女をとらえる」「女を自分のものにする」という意味である。つまり、妻は夫の所有物であり、自分が気に入らなくなったときは、妻を追い出すことは夫（男）の「権利」であり「義務」なのである。

妻の「恥ずべきこと」とは、元来はいわゆる「不倫」などかなりシビアなことが考えられていたのだろう。しかしながら、このような条項はかぎりなく拡大解釈されていく。しかも、妻の言い分が考慮されるわけではなく、どこまでも夫の側の身勝手な判断にゆだねられ合法化されていく。そして、「モーセは、離縁状を書いて離縁することを許しました」と言う。すなわち、「妻に何か恥ずべきことを見いだし」という限定などまったく無視して、離縁状さえ書けば自由に離縁できるという論理にすり替えられている。

イエスは、モーセがこのような掟を書いたのは、お前たちの心が頑なだからだと言い、モーセ律法を相対化し超越している。そして、誰もがよく知っている「天地創造物語」（創世記1,27）と「エデンの園の物語」（創世記2,24）に彼らの関心を向けさせる。イエスの言わんとすることは、「神によって造られた男と女は平等のはずである。それなのに、お前たちが女を勝手にあしらっているのはどういうことなのだ！」ということであろう。古代社会にあつては、これはかなり大胆な発言である。さらに、「人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一つの肉体となる」とたたみかける。

イエスの言わんとしていることは明らかであろう。愛しあう男女の現実を強調しているのである。「深く愛し合う男女はもはや別々の存在ではなく、一つの肉体となっている」のだ。イエスはここで具体的に男女のセックスをイメージしていたのかもしれない。「心が頑な」な（石頭の？）ファリサイ派への皮肉にみちたユーモアがこめられているのだろう。「もちろん、お前たちにそんなことは分かりっこないだろうがな……」。さらにイエスはそれをもう一度わざわざ自分自身の言葉としてくり返す。「一つの肉体である！」ここでのイエスはかなりしつこい。

そして最後に、イエスは「神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない」とおもむろに宣言する。これは決して一般的・普遍的な離婚禁止宣言などではない。イエスを「試そうとした」ファリサイ派の「男たち」との論争の中で発せられた言葉であり、離縁状一枚で男が女をかんたんに離縁できた時代の「男中心主義」に対する烈しい闘いの言葉なのである。したがって、イエスの主張は明らかであろう。「お前たち男どもが勝手に女を離縁しているのは、神に逆らう行為にほかならないのだ！」。

8

男女の性に関するテキストが出たついでに、「姦淫」をめぐるイエスの有名な言葉にも言及しておきたい。

お前たちも聞いているとおり、「姦淫するな」と命じられている。しかし、わたしは言うておく。情欲を抱いて女を見る者はだれでも、既に心の中でその女を犯したのである。(マタイ5,27-28、一部修正)

これもまた一般的・普遍的真理の宣言などではない。論争における凄まじい発言である。そして、ここでもまたイエスは、「姦淫するな」というモーセ十戒を絶対的なものとし、それを守れない人間たちを容赦なく断罪する、律法学者やファリサイ人たちを激しく追及しているのであろう。

イエスはここで「姦淫」を表面的な「行為」だけの問題に留めることなく、人間(男)の「情欲」そのもの、内面的な「心」の奥底にまで徹底している。もちろん、イエスが「心」を重視しているわけではない。どこまでも敵対者(=男)たちへの激しい批判としてである。大胆に意識すれば、次のようになるであろうか。「たとえお前たちがくそ真面目な人間で、姦淫の罪を犯したことなどないとしても、情欲をもって女を見たことぐらいあるはずだ。そのような気持で女を見ている人間は誰でも、心の中で姦淫の罪を犯したこと

になるのだ！」

男が女に対してどれほど強い情欲を抱くものか、イエスは知り尽くしていたのであろう。男としての情欲を抱いているかぎり、敵対者たちも即座に反論することは難しかったにちがいない。情欲を抱かないような男などいるはずがない。やたらに他者の罪を咎めるばかりではなく、たまには自分自身の内面を正直に見つめ直してみたらどうなのだ。お前たちは情欲を抱いて女を見たことが一度もないのか。この時のイエスはかなり憤っていたにちがいない。そして同時に、懸命に笑いをかみころしていたにちがいない。

さらにイエスは「殺人」に関しても、モーセ律法に異議をさしはさむ。この言葉がイエス自身のものかどうか迷うところだが、後半部分のきわめてオーバーな表現は、イエスらしい悪戯っぽさと笑いの精神が入り混じっている。

お前たちも聞いているとおり、昔の人は「殺すな。人を殺した者は裁きを受ける」と命じられている。しかし、わたしは言うておく。兄弟に腹を立てる者はだれでも裁きを受ける。兄弟に「ばか」と言う者は、最高法院に引き渡され、「愚か者」と言う者は、火の地獄に投げ込まれる。
(マタイ5,21-22, 一部修正)

9

最後に、イエスの次の難解な発言にも、笑いの視点から注目しておきたい。

人間の外から中に入ってくるもので、人間を穢^{けが}しうるものなど何もない。むしろ逆に、人間の中から出て来るものが、人間を穢すのである。
(マルコ7,15, 私訳)

非常に抽象的で難解な発言という印象をいだかれるであろう。しかしながら、本当はこれほど即物的でこれほど愉快的な発言もない。先ず、前半の「人

間の外から中に入って来るもの」は、「食物」を意味している。なぜならば、すぐ後の19節で、それは「腹の中に入り、そして便所へと出て行く」と書かれているからである。新共同訳はそれを「外に出される」と訳している。イエスが「便所」などという単語を使うはずがないと考えているからだろうか。だがこれは文字通りに訳されなければならない。すなわち、食物は腹の中に入り、(大便となって)便所へと出て行くだけのものだから、人間を穢すものではないのである。ここでイエスは食物規定全体を廃棄している。というよりも、そのような規定を文字通り一笑に付している。食物は、「腹の中に入り、便所へと出て行く」だけだと、多少ふざけながら発言したのであろう。

次に、後半の「人間の中から出て来るものが、人間を穢す」が検討されなければならない。「人間の中から出て来るもの」とは、はたして何をさしているのだろうか。多くの研究者が、それをいわば内面化し、人間の「心」や「言葉」や「意志」や「主体性」などに還元している。しかしながら、私はそれをここでもやはりきわめて即物的に理解したい。すなわち、「人間の中から出て来るもの」もまた、やはり19節の「腹の中に入り、便所へと出て行く」もの(=大便)なのである。すなわち、「人間を穢すものは、食物などではなく大便じゃないか。あれこそほんとうに汚ねえからな」。

これはユダヤ教の「食物規定」に対する批判である。「貧困と飢餓」というぎりぎりの状況を生きている人間にとって、どの食べ物を食べてよいかなどということは、まったく問題にはならなかったであろう。目の前にあるものをガツガツと食べてしまうしかないのである。イエスの発言はそんな人々の正直な気持ちを代弁するものであろう。

これもまた、皮肉とユーモアに満ちた実にイエスらしい名セリフと言わねばならないであろう。おそらくイエス周辺にいた聴衆の間に大爆笑の渦を巻きおこしたにちがいない。やや気品には欠けるけれども、イエスの笑いの上位にランクされるであろう。イエスはまさにこういう人間だったのだ。だからイエスは魅力的なのだ。